

若手研究者に想う — 小さくとも世界 No.1 の “Small Giant Company*”を目指してきた立場から

フロンティア・ラボ(株)

渡辺 忠一

私は、東北で仙台に次ぐ小都市、郡山市にいな
がら、会社創立時点から分析の一分野で世界 No.1
を目標にして、今から 18 年前に創業した。ここでは
その経験を振り返りながら、表題のタイトルで一文を
寄せ、志を持てば、片田舎にいても世界 No.1 が達成
できるということを知って頂き、若手研究者にチャ
レンジ精神の奮起を促したい。

会社創立当時の 1991 年前後は、日本のバブル
崩壊の兆しが明らかに見え、テレビ・新聞・雑誌など
では不景気が報道され、すでに日本経済は下降線
を辿っていた。そうした最悪の時期に、わずか2名で
創業に踏み切ったが、当初から志が高すぎると、い
ずれの親戚・友人・知人からも言われ、他人から見
れば正に無謀と見られたと思うが、私はそうでなけれ
ば創業する価値が無いと信じていた。そのビジネス
とする製品は、ある大学教授が 10 数年をかけた基
礎研究の成果である GC の心臓部を担う“世界初の
金属製キャピラリー分離カラム”であり、もう一つはす
でに 100 報を越える論文があるにも関わらず、当時
はまだ一般に広く利用されていなかった、縦型の熱
分解装置であった。これらは現在も会社の両輪とし
て活躍している。

私は最初から分離カラムを基礎研究段階からす
るつもりで創業したわけではないが、自分もその研
究開発に 20 年以上従事した経験があるので、仮に
何らかの問題があっても何とか乗り切れるであろうと、
当時は無謀にも高をくくっていた。しかし実際には、
創業当初の数ヶ月の段階から、キャピラリー分離カ
ラムの製造歩留まりが 10% 以下という、大きな暗礁
に早くも乗り上げてしまった。正に 1 年未満で倒産の
危機に直面したわけである。そのために当然資金は
底を突き始め、自分の甘さに同僚とその家族をも巻
き込んだ状況を悔やんでみたがどうにもならない状
況であった。しかし、友人の弁護士と株主の援助の
お陰でこの事態を何とか乗り切ることができた。一般
に、前人未踏のものには恐ろしい魔物が潜んでいる

と言われているが、その当時は私や知人達が、それ
までの“勘と経験”を総動員してもいかんともし難か
った。今にして振り返れば東北大学の大見名誉教
授が言われる“国際競争力のある独創的な技術開
発には、学問に基づく本物の産業技術が重要であり、
そのためには己の勘と経験の世界に加えて、確固
たる学問に立脚した洞察力と実行力が大切である”
という見地からの解決法が必要であった。そういうこ
とで、創業当初からこの世界初の製品を開発し、し
かも安定した生産と販売を継続することによって、お
客様からその対価を頂くことは生半可でないことを
思い知らされた。また、学術的な研究成果、それに
基づいた試作と商品化とは、全く異次元のものであ
ることを肌で学んだのである。さらに、一度でも奇跡
的に製造できた事実を励みとし、諦めないで“できる
んだ、するんだ”という執念を持続することが如何に
重要であるかをも体得した。考えに考え抜いてこそ
成功に辿り着けるもので、成功と失敗は表裏一体で
あるとはよく言ったものである。ちょっとした事実を見逃
したりせずに、加えてファールのようにじっくりと現
象を観察することで、意外とその薄皮一枚をすりと
潜り抜けることもできることを習得した。

ここで話は変わるが、東北大学加齢医学研究所
医の川島教授が言われているように、脳の機能は一
般的に 20 歳頃を境に減衰の一途を辿るが、65 歳頃
を頂点として 50-80 歳の範囲では、知識を問う試験
成績においては 30 代よりも優れているという。つまり
140 億個もあると言われている脳の引き出しの中味
には、知識に加えて勘と経験に基づき、それらが相
互に関連した状態で理路整然として詰まっており、
その総合判断力は 65 歳頃で極大値をとるそうである。
現在のコンピュータが如何に優れているように、あるい
は元気な若人がいくら束になったとしても、年月を経
て集約した英知には適わないことも多々あり、一般
的にその道の専門家の知識と洞察力にはかなわな
い。しかしながら、多くの場合彼らも自分の経験とい
うタガにはまった考え方から、脱却できない場合もあ
ることも事実である。これは別の言葉では、融通が利
かないと言われているが、されど、若人はこの集約し
た総合判断力の頭脳をうまく活用しない手はないし、

また有効に生かされれば専門家としても嬉しいのではなかないかと思う。

現在は、インターネットが世界の境界を事実上なくし、世界のどこに居ても瞬時に多くの望む情報を得る事ができる時代であることは、衆知の事実である。インターネットを用いたSkypeは電話革命に値すると思うが、世界中のあらゆる所へ何時間話しても無料の時代が実現しており、これを使用すればかなりの経費節減にもなる。無料といっても、そこで求められることは、コミュニケーションに必要な語学手段となるが、それにも増して重要なことは母国語で理路整然と考え、議論できる基礎力をつけることであろうと思う。

それと平行してこれからの若人は、この狭い日本で、東京などの大都会でなければビジネスが出来ないなどという時代は、確実に去ったことを再認識すべきであろう。私は創業当時から大都会でビジネスをどうしても開業しなければならないという必要性を感じず、当社製品のカタログ表紙には世界地図を描いて、その一つに東京と郡山の位置は、殆ど同じであることを主張してきた。確かに新卒の採用となると、東北でしかも福島県という理由で敬遠され、優秀といわれる若人の採用が極めて困難であることは事実である。しかし、外国人の採用においては、東京駅から1時間30分弱というアクセスの良さと、果物の美味しいこの地区はプラスの要因であった。若人にとっては、新たなる環境で自分がどう成長し、何に生甲斐をかけてチャレンジできるかが重要である。この点から、両親から頂いた限りない可能性と潜在能力に磨きをかけ、そしてそれらを生かすチャレンジ精神を養うことが、むしろ大切ではないかと思う。

<2009年2月の分析化学会出版の「ぶんせき」ロータリー談話室から>

*現在は”Giant Small Company”とし、現状の会社業態に沿って語順を変えております(2021年3月)。